

歴史を さわか₃せた 女たち

日本篇

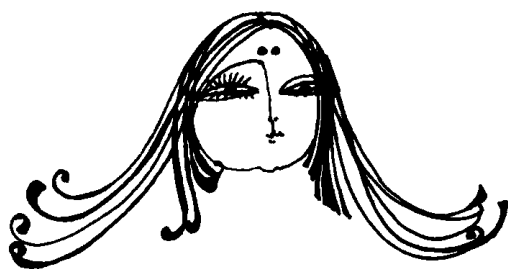
永井路子



歴史を さわがせた 女たち

日本篇

永井路子



文藝春秋

著者略歴

大正十四年三月東京生。

東京女子大国文学部卒業。

小学館勤務を経て文筆業に入る。

昭和三十九年「炎環」で第五十二回直木賞受賞。

歴史をさがせた女たち 日本篇

一九七五年十二月十五日 第一刷

一九八一年十二月十五日 第十七刷

定価 九五〇円

著者 永井路子

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
TEL (東京) 二六五一一二一一

印刷所

凸版印刷

製本所

加藤製本

*万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

はじめに

本書はさきに日本経済新聞に連載し、同社から刊行された「日本スーパーレディー物語」を改稿、加筆したものです。新たに四人の女性を加えたほか、この際書き下しに取組むようなつもりで、全体に筆を入れ、表題も「歴史をさわがせた女たち（日本篇）」と改めました。同じような狙いで世界史の女性を扱った「歴史をさわがせた女たち（外国篇）」（日本経済新聞連載・文藝春秋刊）の姉妹編としてお読みいただければ幸いです。

はじめに

ここにあげた三十三人の女性のほとんどは、日本史上よく知られた人たちばかりです。が、この本をお読みになった方は、それらの女性に対する評価が、これまでと余りちがうので、不審な思いをされるかもしれません。

たとえば、史上指折りの悪女が、かわいそうな女性になっていたり、貞女が格下げになっ

ていたり、美女が不美人になっていたり……。

けれども、これは、思いつきでわざと歴史をひっくりかえしておもしろがっているわけではありません。私はこれまで、ほとんど歴史小説ばかり書いて来ましたが、もともと調べることはすきなので、これを書くにあたって、できるかぎり史料に忠実であることを心がけました。その結果、どうしてもこうなる、ということだけを書いたつもりなのですが、それがかえって従来の通説とはちがった結論をうみだしてしまったのです。

こうしたちがいが出て来たのは、ひとつには、従来の通説の裏づけになっていたもののなかに、あまり史料的な価値のない偽書がかなりまじっていたこともありすが、さらには、ものさしのあて方の違いもあると思います。

じつは、このものさしのあて方というものの、時代によってさまざまで、げんに、ここにとりあげた女性でも、時代によって、悪女、善人、また悪女……というふうには、二転、三転している場合が多いのです。そして、いろいろ調べてゆくうち、その人物に対する定説と知られていたことも、その多くが、江戸時代的なものさしのあて方をしたものだ、ということに気がつきました。たとえば、それまではよい人間だと思われていたのが、江戸時代の封建的ものさしで計った結果、悪い人間になってしまった、というような例も、かなりあるのです。が、明治維新以来百余年、世の中のしくみも、ものの考え方もすべて変化した現代、私たちが江戸時代のものさしをありがたがる必要はさらさらありません。現代は現代なりの見方

はじめに

があつていいはず。そして、歴史の中に生きた女性をふりかえることによって、現代という、ひとつの「歴史」を生きる私たち女性の立場を、もう一度考えなおしてみようではありませんか。

なお改稿出版を快く御了承下さった日本経済新聞社に御礼申上げるとともに、さまざまの御教示を下さった諸先輩に感謝いたします。

昭和五十年九月

永井路子

歴史をさわがせた女たち（日本篇）

目次

*愛憎にもだえた女たち

和泉式部

王朝のブレイガール

一三

孝謙女帝

栄光の中の孤独

二六

北条政子

鎌倉のやきもち夫人

三五

道綱の母

書きますわよマダム

四五

二 条

自作自演、わが恋の記録

五三

常磐御前

作られた美談のヒロイン

六三

*ママゴン列伝

淀 君

豊臣家の猛母

七三

橘三千代

日本一の売り込みママ

八一

熊 姫

千姫伝説の演出者

九一

春日局

疑似母性症

九八

*強きもの——それは人妻

一豊の妻

超大型のスタンドワイフ?

一〇七

秀忠夫人・お江

戦国の世のツヨイツヨイ女性

一二五

細川ガラシヤ

信仰あつき強妻

一二四

北政所

日本一の「オカミサン」

一三二

*女が歴史を揺さぶるとき

卑弥呼

女王は目下の成長株

一四三

持統天皇

理性的で果敢なる女帝

一五三

藤原薬子

日本のクレオパトラ

一六五

丹後局

大型よろめきマダム

一七二

阿野廉子

南北朝の妖霊星

一七九

天秀尼

かけこみ寺の守護女神

一八七

天璋院

守備型女性のナンバー・ワン

一九四

若江薫子

尊王攘夷の女流政治評論家

二〇一

*ケチと浪費の美德

松下禪尼

ご立派！ ケチケチ・マダム

二二一

光明皇后

日本一の浪費夫人

二二八

阿仏尼

欲にからんで五百キロ

二三六

日野富子

室町の利殖マダム

二三三

*勇 婦 三 態

巴・板額

男まさりの女武者

二四三

神功皇后

幻のジャンヌ・ダーク

二五〇

亀 姫

戦国の戦中派

二五七

*裏から見た才女たち

紫式部

高慢なイジワル才女

二六七

清少納言

ガク振りかざす軽薄派

二七四

静御前

レジスタンスの舞姫

二八一

出雲お国

自力で売り出した大スター

二八七

装画・カット

村上豊

A D

坂田政則

愛憎にもだえた女たち



和泉式部……………王朝のプレイガール

フーテン、フリーセックス、同棲時代……ほんとにいまの若いものは、と眉をひそめるオトナたち。それをしりめに、

「古くさいオトナにはわからないさ」

と若い世代はうそぶく。

が、たいへん新しいはずのそのフリーセックス、じつは日本ではとうの昔に実験済みなのだ。古代の歴史を虫眼鏡でじっくりのぞくと、すべてそれであるかのようにも見えるが、中でも何やらそれが優雅な装いに包まれているのは、王朝はなやかなりし平安時代、そのフリーセックスの女王こそ、女流歌人和泉式部いずみしきぶなのである。

彼女の父は大江雅致まさむね、冷泉上皇れいぜいの後、昌子内親王しやうしんしんのうにつかえる役人。母もこの昌子の乳母めのとだから、いわば職場結婚の、まあ中流官吏の家庭だった。

「まあ、いい家の娘が、あられもない——」

世の中ではいつもそう言うが、むしろこの階級がいつの世にもくせものなのだ。

しかも彼女の両親の職場だった昌子内親王の後宮——こうした高貴な女性のサロンこそ、くせもの中のくせもの、しじゅう愛欲と不倫が渦まいていた。その後宮をわが家のようにして生いそだった式部が、いつのまにか早熟な恋の妖精になっていたのも無理からぬことではないか。

それに——。現在とそこでは結婚の形態がかなりちがう。一夫多妻はあたりまえで、男はこれぞと思った女のところへ、あちこちと通っていく。なかでいちばん家柄もよし、財産もあり、みめかたち、心ばえすぐれた女が正妻となつて、やがて男はその女の家でくらすか、あるいは一家をかまえるかするのだが、かといって、これまで通っていた女とぶつ切り切れるわけではない。彼女たちは、後世の「二号」のような日かげものではなく依然として正妻に準ずる本妻としての権利をもっているのである。だから正妻たるものも「結婚しちやえばもう安心」とばかりにデンと構えるわけにも行かないし、他の女たちも捨てられまいと腕によりをかける。そのためには女たちは今よりずっと「恋じょうず」である必要はあったらしい。

捨てたり捨てられたり、なかなか気の休まらない生活だが、そのかわり、捨てられたからといって、明日の生活にも困るというわけではない。当時の女は家つきで家屋敷などは全部女の子が相続する。男の方はそこへポツとやって来て、食事はもちろん、着るもの一切の面倒をみてもらうのが実情だった。当時の男たちが、腕によりをかけて恋文を送ったりしたの